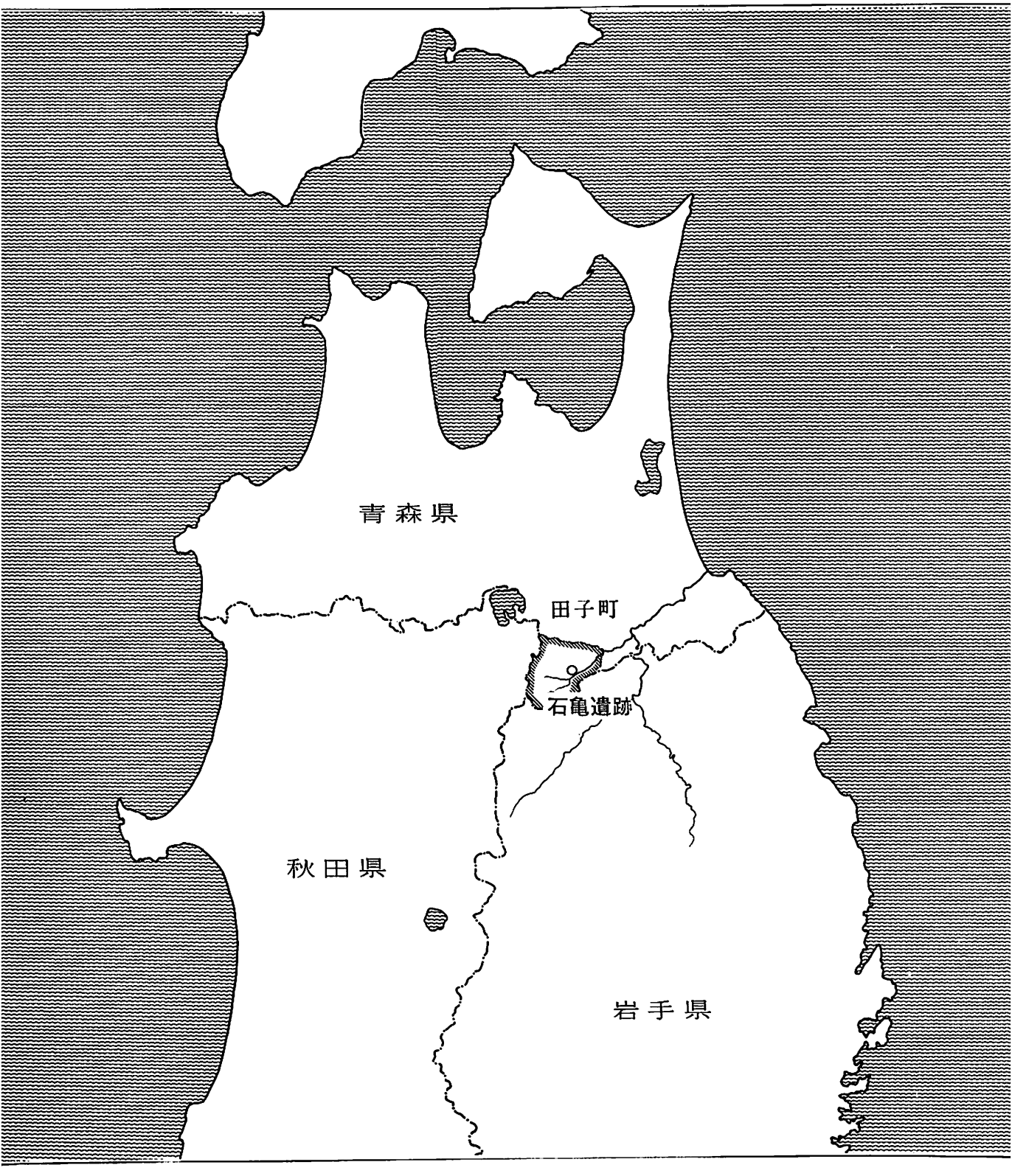
青森県田子町
石亀遺跡第一次発掘調査概報



1971

平安博物館

はしがき

青森県三戸郡田子町大字石亀字石亀に存在する本遺跡は，縄文時代晩期前半の大洞ＢＣ式を主体とする時期の遺跡であり，その発掘調査は，平安博物館が考古第二課を担当課として本年度より３カ年計画で実施するところの，『日本文化の源流の研究』に基づくものである。

本研究の主旨は，縄文時代に農耕が存在したのではないかという仮説の重要性を，日本文化の源流を縄文時代に遡り得る可能性を明確に指摘した点に認め，かつ問題の深化をはかるために単にその仮説の可否を論じるにとどめず，多面的かつ総合的な視野からの検討に寄与し得る資料を整備することにある。水稲栽培の開始された弥生時代直前の縄文晩期には，大まかにみて西日本の御領文化と東日本の亀ガ岡文化が併存したが，特に後者は経済基盤の問題のほかに，きわめて呪術的性格の濃厚なことが従来より注目されてきている。亀ガ岡文化を彩る多種多様な遺物には確かに注目すべきものが多い。しかしその出土状態や量的構成を，特に村落内での位置づけと関連させた資料はない。

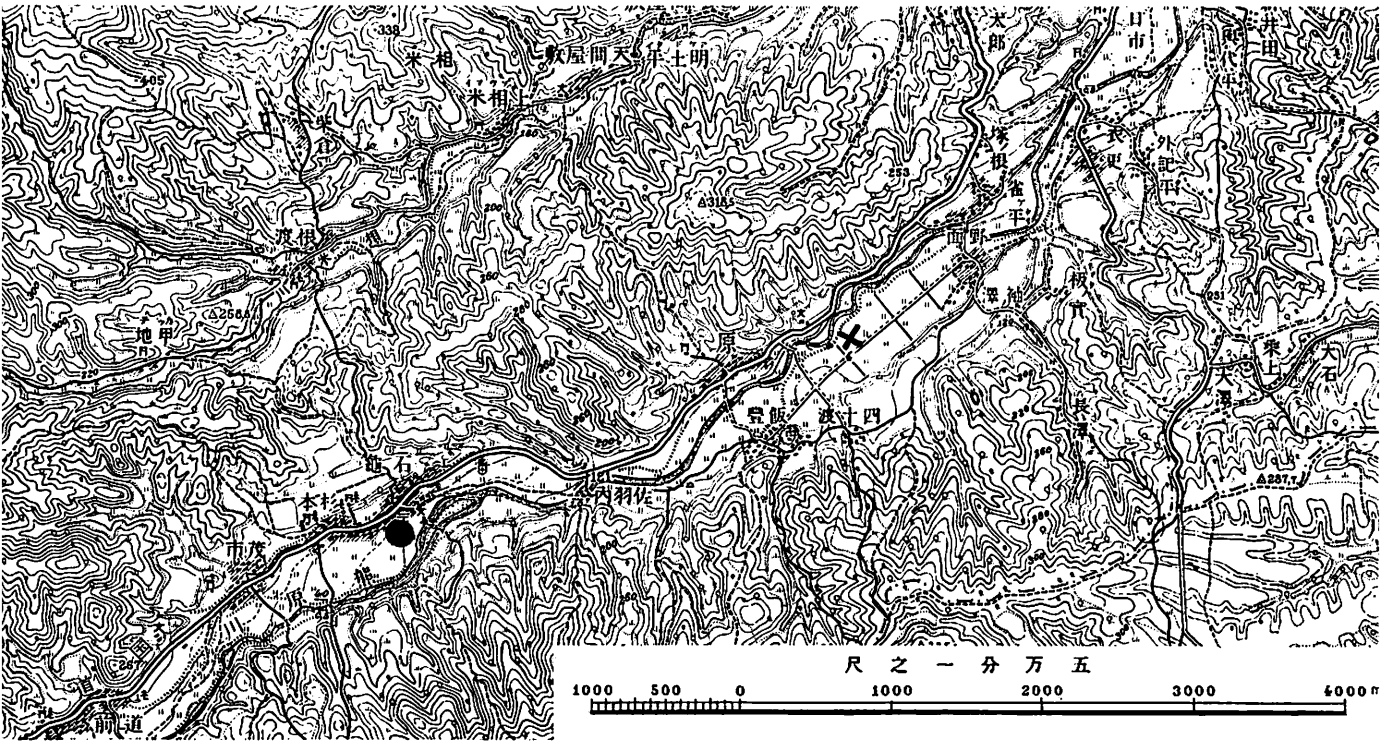
石亀遺跡は，これらの要請にこたえて亀ガ岡文化の主要文化センターの１つである馬淵川流域内から選択されたのであり，本年４月に第１次発掘が実施された。本書はその概要である。

はじめに本研究の主旨に賛同され寄附金を寄せられた方々に，銘記して謝意を表する次第である。

株式会社日立製作所・株式会社日本興業銀行・株式会社高島屋・株式会社富士銀行・三菱電機株式会社・三菱信託銀行株式会社・旭硝子株式会社

石亀遺跡遠景
（南側より臨む）

東地区記念撮影

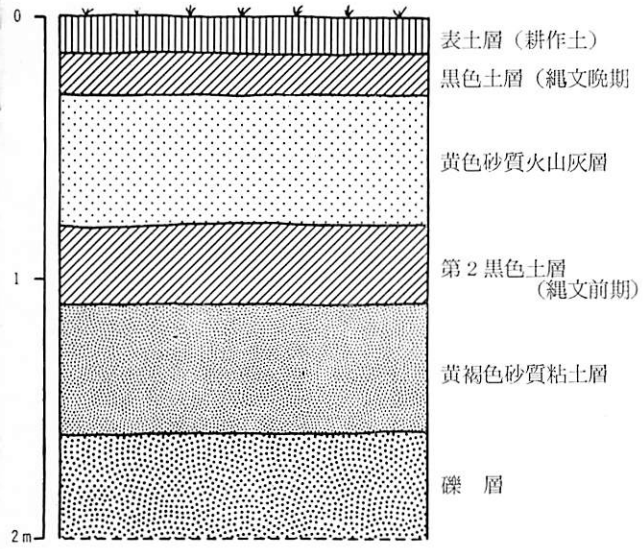


遺跡付近地形図　石亀遺跡（●印）は馬淵川支流熊原川北岸の河岸段丘上に位置する。東方約３kmに同時期の野面平遺跡（×印）がある。

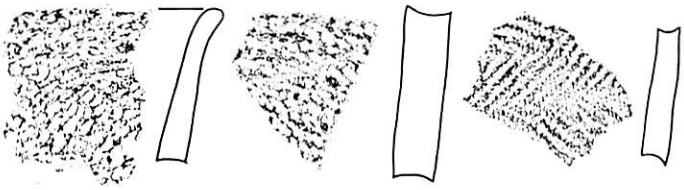
東　地　区

北を除いた三方を水田で囲まれた微高地上の畑地である。行政区画上は大字石亀字石亀48番地で，木根定夫氏の所有地である。かって現三戸城保管の大岩偶など，多数の優品が出土したことで知られている地区である。

この地区のほぼ中央部に，10×10mのＡ地区，10×８mのＢ地区，１×６mのＣ地区を設定して発掘を行なった。約10cmの表土下に，約20cmの遺物包含層があるが，かなり攪乱が多く，プライマリーな状態での出土品は少なかった。しかし岩版未完成品や小土偶など，個々の遺物には注目すべきものが多い。またＡ・Ｂ両地区の境界には不整形な土壙が検出され，その上部には土器がまとまって出土した。これらの土器を含め，出土土器の型式は，ほとんど大洞ＢＣ式に限られる。



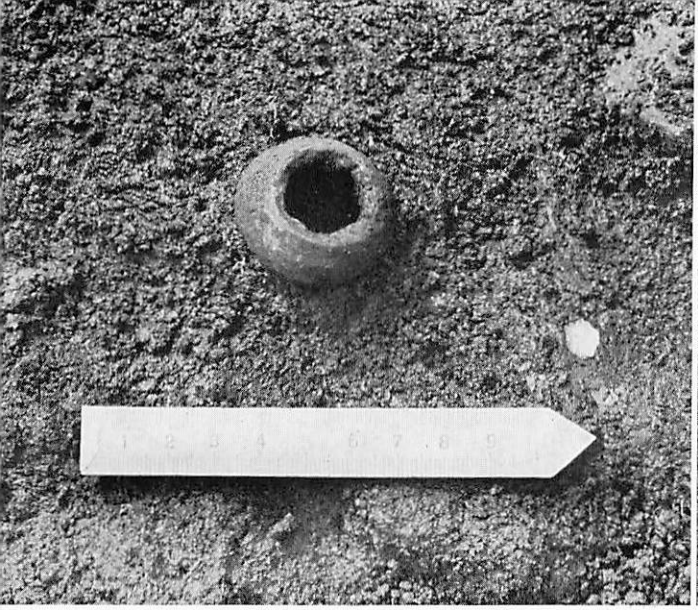
東地区層序模式図

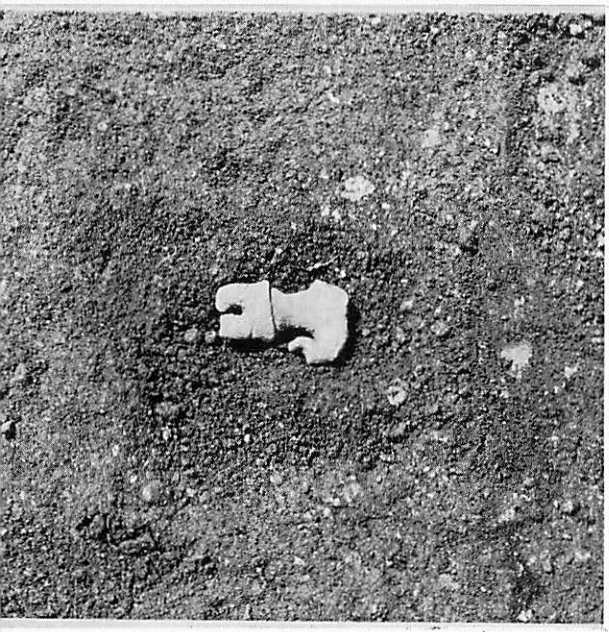


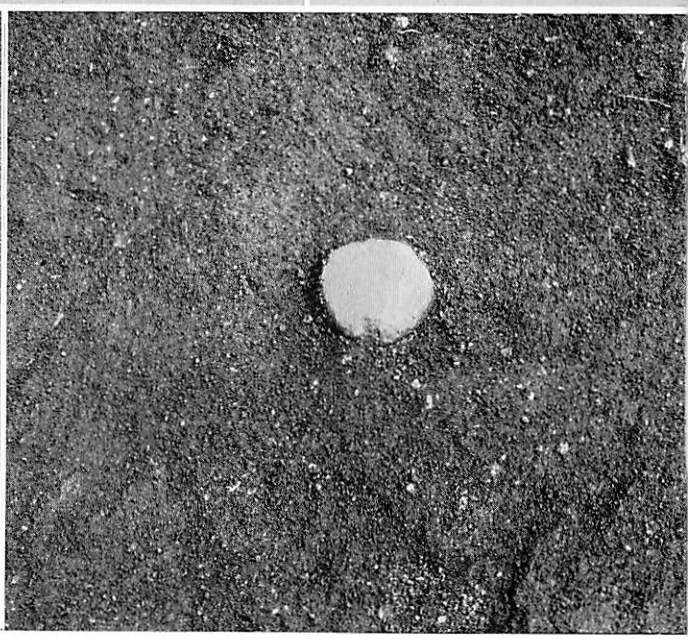
東地区第２黒色土層出土土器拓影

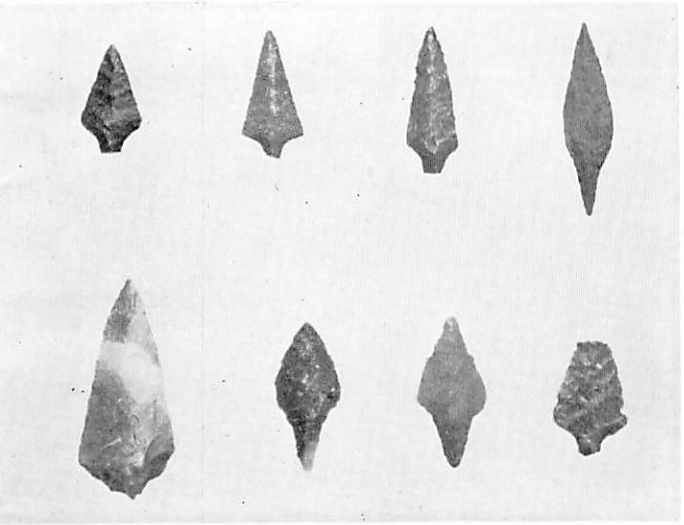
層序　縄文晩期の遺物包含層下の火山灰層は，約50cmの厚さをもち，何らの遺物も含まないが，この層の下の漆黒の黒色土層を発掘したところ，きわめて少量ではあるが，縄文前期の円筒下層式系の土器片が出土した。

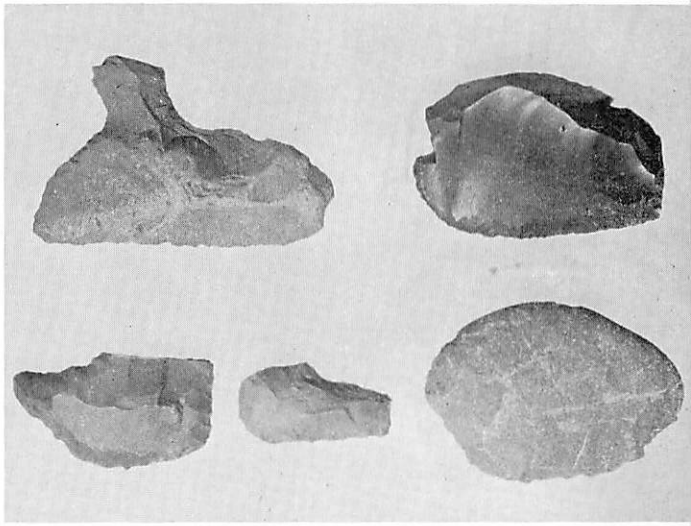
このことから，縄文時代の前期と晩期の間に火山灰の堆積が行なわれたことがわかるが，地質学の成果によれば，この供給源は十和田火山の噴火であり，縄文時代の環境を考える上で興味深い。

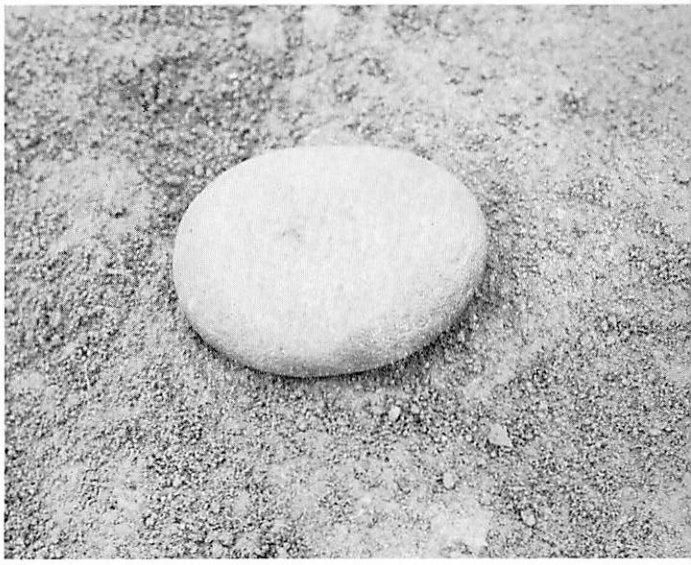








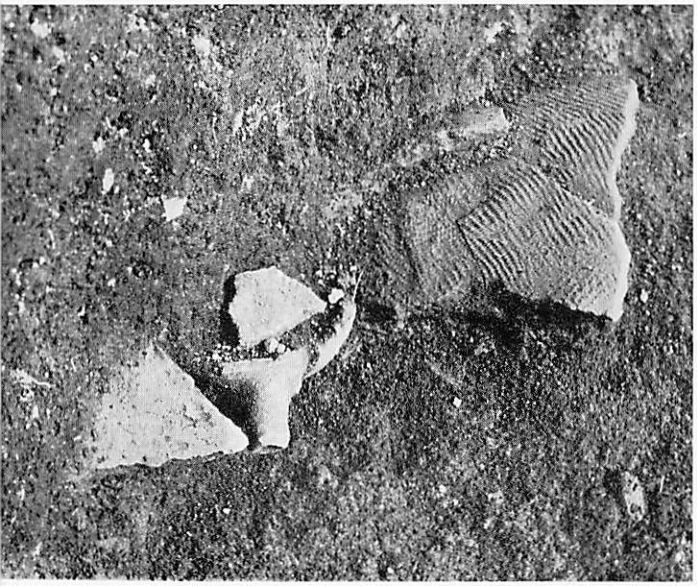


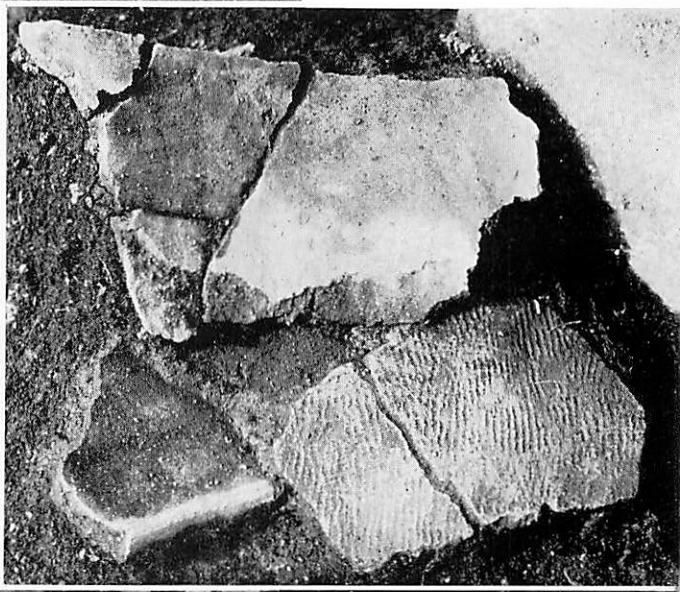


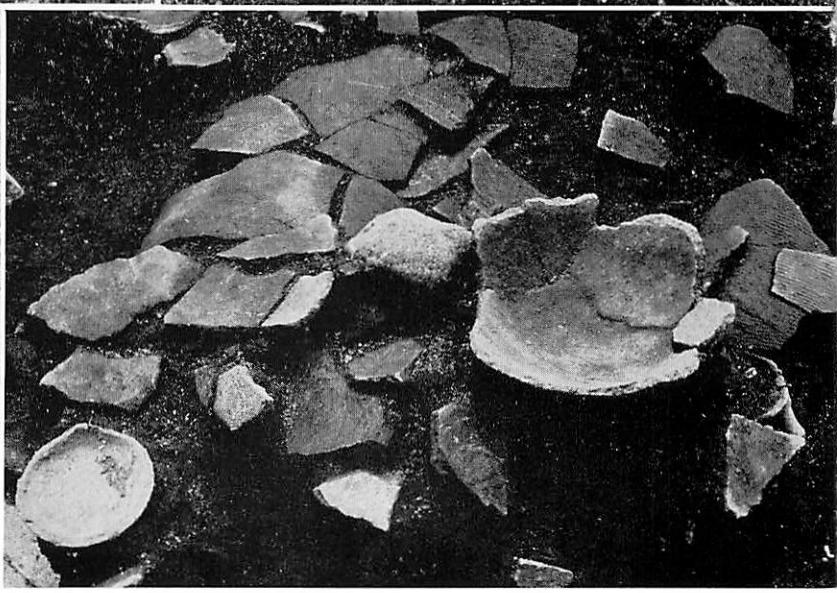
3頁：小形壺出土状態（上左）　丹塗器台出土状態（上右）
土偶出土状態（中左）　同表（中中）　同裏（中右）
糸巻形土偶片出土状態（下左）　円盤状土製品出土状態（下右）

4頁：岩版出土状態（上左）　岩版未製品出土状態（上右）
東地区出土石鏃（中左）東地区出土石匙・掻器（中右）
磨製石斧出土状態（下左）　敲石出土状態（下右）

東地区土器群出土状態





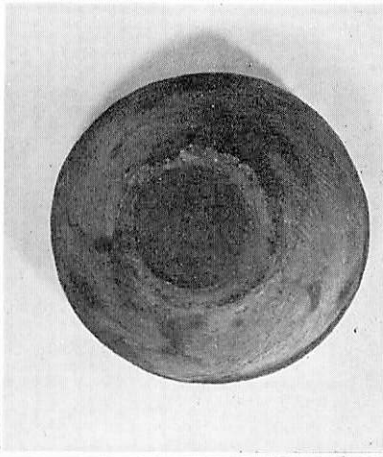


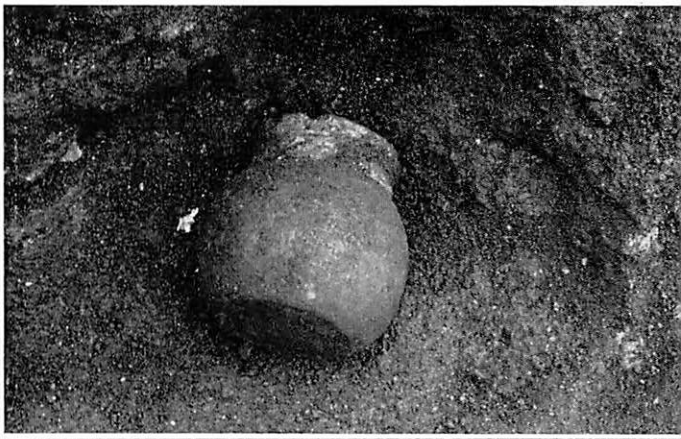
西　地　区

東地区とは水田をはさんで東南方 約100m の地点に当る。東と南は水田に囲まれ，西から北にかけては低い台地となり，その東斜面の畑地が西地区である。行政区画上は大字石亀字石亀38番地で，築田実氏所有地である。

発掘は東地区よりまず着手したのであるが，その間児童により乱掘がこの西地区で行なわれ，放置すると遺跡全体の把握を行なう上に障碍になる恐れが生じたので，関係機関と協議の上後半はこの西地区の発掘も併行して実施することになった。

発掘は乱掘の多かった畑の北半に，２×20mのトレンチを設定し，西から順に１～10区と命名した。層位は，約20cmの表土下に約20cmの遺物包含層があり，その下面は截然としていた。特に８区を中心としたところでは夥しい遺物がみられた。出土土器の型式は大部分が大洞ＢＣ式であるが，東端の10区では層をわけて下層より大洞Ｂ式が出土し，西よりの区では大洞C_1式も若干混じえる。この層の下に約30cmの遺物の少ない層があり，この下に火山灰層がある。上記２層は黒色を呈し柱穴などの判別は困難であったが，火山灰層上面では８区を中心に柱穴様のピットが数個認められ，遺物包含層との関係が注目される。





台付深鉢形土器出土状態

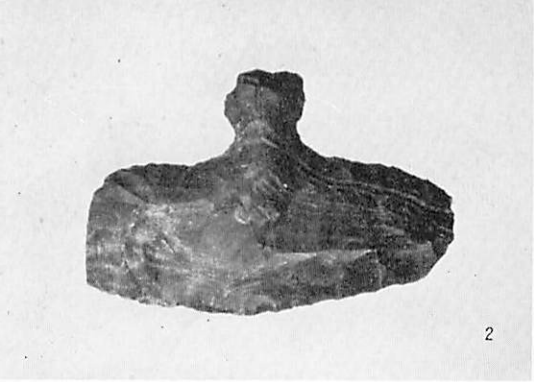
同上正面　　同上底面

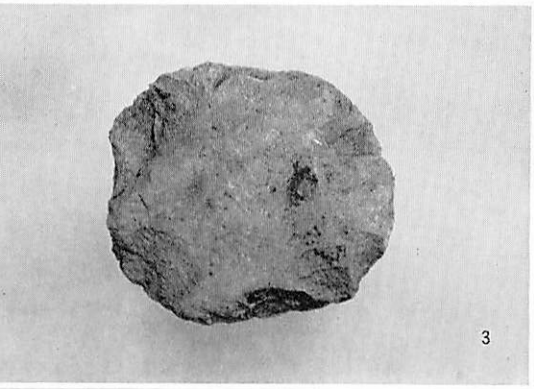
（器台の部分が打欠かれている）

西地区記念撮影

丹塗小形壺出土状態

敲石を抱く土器の出土状態





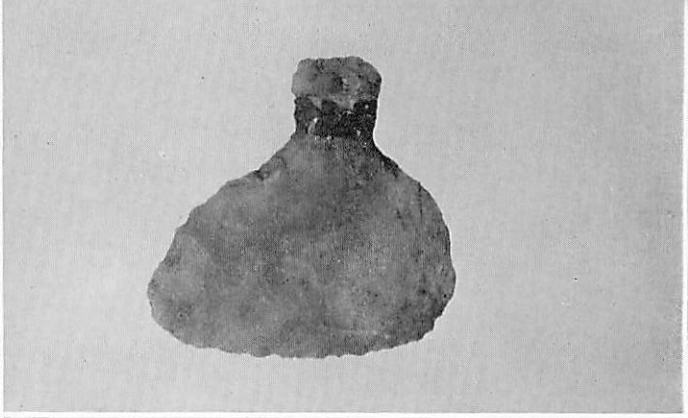
西地区8区遺物出土状態

壺形土器　　注口土器

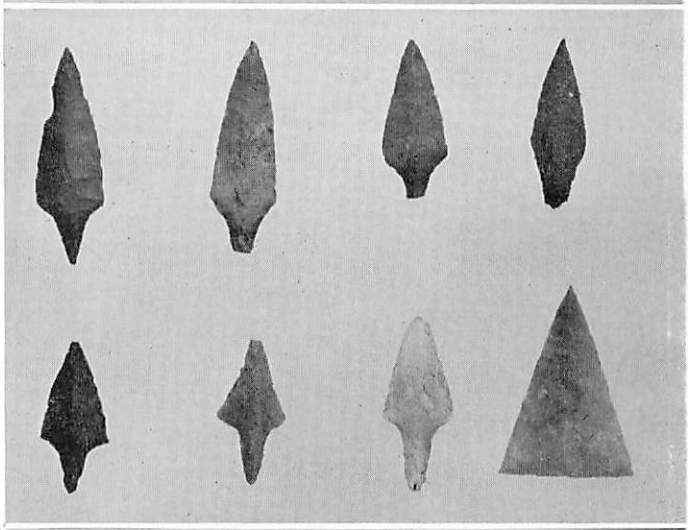
小形丹塗壺　　土偶出土状態

岩版未製品出土状態　　丹塗耳栓　　同耳栓出土状態

ピッチ付着石匙出土状態

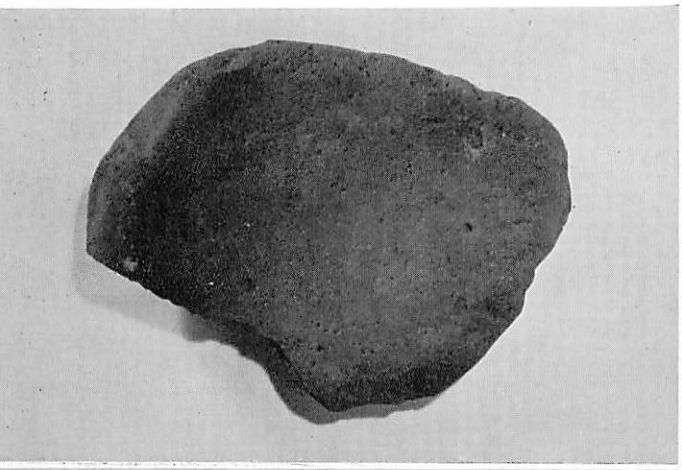


ピッチ付着石匙

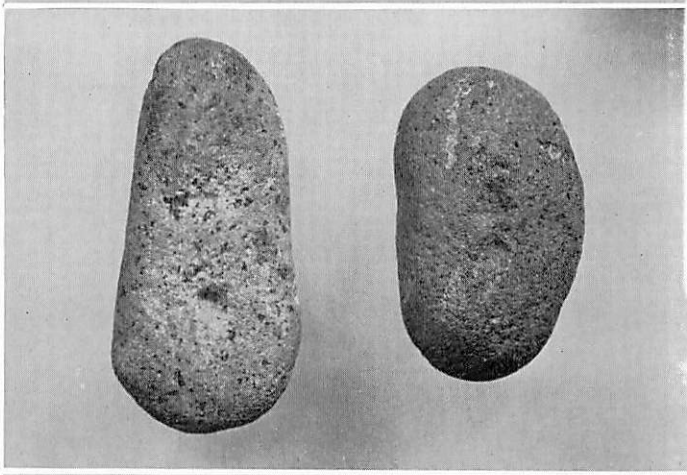


西地区出土石鏃

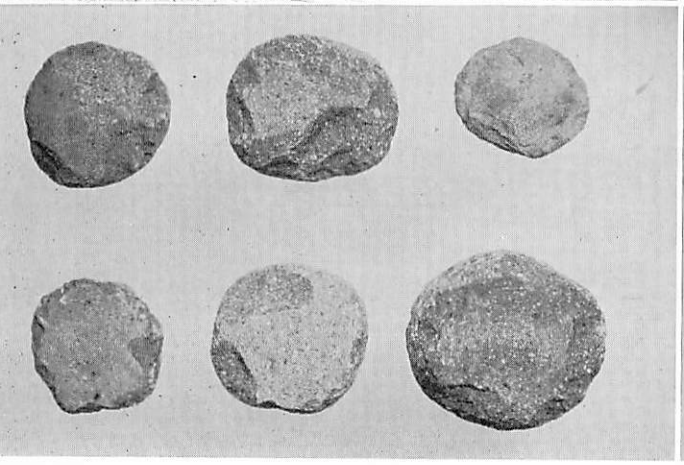
石　皿



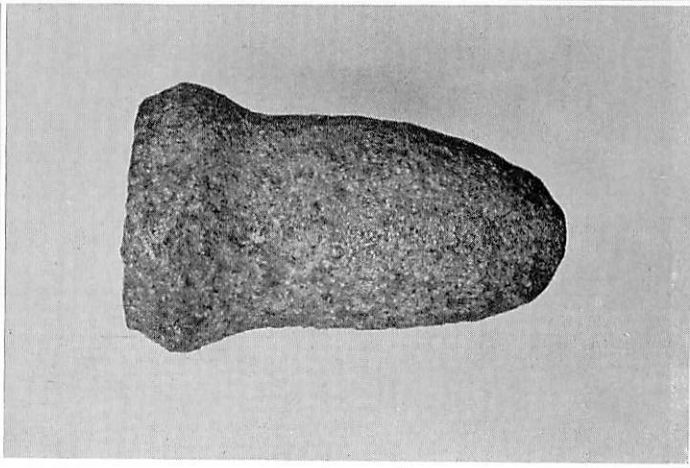
敲　石

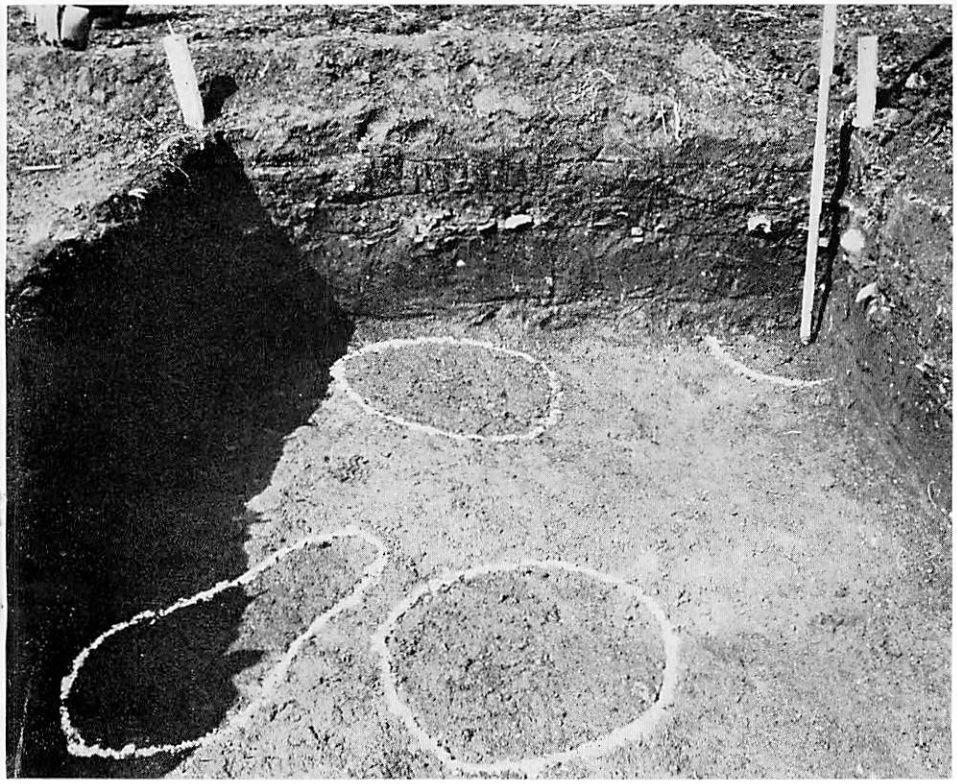


円盤状石製品



独　銛　石





西８区における柱穴様ピット群

あ　と　が　き

石亀遺跡のうち東地区・西地区と仮称した２地点をまず調査したのであるが，全体の範囲などはまだ調査が十分でない。しかしながら縄文晩期前葉の大洞ＢＣ式の時期に，少くとも２地点が存在したこと，しかもそれぞれに同様な文化内容が確認できたことは第１の収穫である。とりわけ岩版未成品が両者に検出できた意義は大きい。土偶・土版などと異なり未成品の残存し得る岩偶・岩版については，その製作単位を知り得るという好条件が付随する。この種の遺物が，家族単位で製作された可能性が大きくクローズアップされてきた。

第２の収穫は，亀ガ岡文化に伴う諸遺物の量的構成を把握できることにある。亀ガ岡文化の遺物には美術工芸的にも優秀なものが多い。しかしそれらがすべてではなく，全体の中で一定の割合で存在するにすぎない。その比率とあり方は，今後の資料分析によって明確にされてくるであろう。１例をあげてみよう。土器の器形は多種多様であり，装飾的呪術的文様も盛行しているが，よくみるとこれは主として壺や注口土器においてであり，粗製の鉢形土器には装飾性が低い。そして漁業の盛んな青森県ドウマンチャ貝塚・福島県寺脇貝塚では前者の土器が少ないことが判明していたが，亀ガ岡式土器の標準的な組成は好データに欠けていた。本遺跡の資料はこの欠を補うものとして十分である。なお本遺跡の主要生産用具としては，狩猟具としての石鏃・石槍・石匙，植物調理具としてのたたき石・磨石・石皿などがあるが，漁具は全くみられない。

第３の収穫は，住居址検出の可能性がでてきたことである。すでに中部・関東地方の縄文中・後期では集落構造が検討される時点にきていながら，亀ガ岡文化では住居址自体の検出例すら10基にみたない。もっともこれには黒土層中に竪穴住居を掘り，それを黒土が埋めていることから検出が困難であるという理由がある。遺物を多量に包含する層の存在もこのことに関係があるのであろう。こうした困難にもかかわらず，われわれは住居址を掘り集落構造をも明らかにしていきたいと念願している。西地区８区を中心に検出したピット群が，はたして柱穴かどうか一抹の不安がないでもないが，８月下旬に行う第２次調査においては，この点に問題点をしぼって発掘を行うつもりである。

このほか大洞Ｂ式と大洞ＢＣ式が層位的に出土したこと，接着剤にアスファルトを使用した石鏃・石匙の好例がみられたこと，丹の付着した磨石や石皿が検出されたことなど，いくつか注目すべきデータもあるが，これらはいずれ第２次調査の成果と併せて，本報告中に記されるであろう。

参加者氏名

渡辺　誠（平安博物館考古二課）
片岡　肇（平安博物館考古二課）
長谷部　学（平安博物館考古一課）
鈴木忠司（平安博物館考古一課）
寺島孝一（平安博物館考古三課）
山本暉久（早稲田大学大学院）
阿部祥人（慶応義塾大学大学院）
柏瀬充子（慶応義塾大学文学部）
鈴木美千子（慶応義塾大学文学部）
山岸良二（慶応義塾大学文学部）
鈴木克彦（国学院大学大学院）
工藤竹久（立正大学文学部）
川端敏史（同志社大学文学部）
中村善則（大阪市立大学文学部）
木村幾多郎（九州大学大学院）
小池史哲（別府大学文学部）
塩谷隆正（青森市教育委員会）
三宅徹也（青森県郷土館準備室）

□参加協力された以上の諸氏をはじめ発掘調査を快よく許された木根定夫・築田実氏，及び青森県教育委員会・田子町教育委員会に対し，衷心より謝意を表する次第である。

青森県田子町石亀遺跡第一次発掘調査概報

発行日　1971年8月20日
編集者　平安博物館考古二課　渡辺　誠
　　片岡　肇
発行者　平安博物館
　　京都市中京区三条高倉
　　振替　京都850番　電話 075(222)0888
頒価　300円（送料共）

制作・ビクトリー社